琉游舎

アトリエ琉游舎だより 178号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/
琉游舎for healing https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3

2024年5月8日発行

出るやいな 蚯蚓は蟻に 引かれけり

一茶

●二十四節気で5月5日から約2週間は「立夏」です。夏の兆しが見え始める頃です。立夏の次候、10日から５日間を「蚯蚓出 (みみずいずる)」となります。冬眠していたミミズが地上に現れ始める頃です。暦の上では夏です。温暖化で連休中に県内でも真夏日になったところがあるようなので、近年はもう「暦の上では」の注釈をつけなくてもよいかもしれませんが。

●「出るやいな 蚯蚓は蟻に 引かれけり」は「蚯蚓出」のミミズの悲劇を詠んだ句なのでしょう。地温で夏を感知したミミズが土中から顔を出したとたん暑さのせいか、太陽光にやられたのか分かりませんが、干からびたミミズを穴に引いていく蟻の群れが眼に浮かんできます。

●今の時期に畑を耕していると、よくミミズに出会います。ミミズは畑には大切な生き物なので、丁寧にまた土の中に戻してあげます。ミミズには目がありませんが、光を感知し暗がりに進む性質をもっているので、「目見えず」が転じて「みみず」になったもといわれていますが、真偽の程は分かりません。ミミズが土の中を移動するときにできたトンネルは、植物の成長に大切な空気や水の通り道となります。また土の中に窒素やリンを含む栄養豊富なフンをしますが、これは肥料と同じ役割です。ミミズが多く生息する大地は豊かな土壌です。

●この豊かな土壌にはミミズだけでなくバッタやテントウ虫など野菜の葉を食べる虫も集結します。野菜用の肥料を拝借する雑草も意気盛んです。しかし除草剤や農薬で解決しようとしたら、ミミズは住まなくなり、受粉してくれる蜂もやってこなくなるでしょう。出来ることはせっせと雑草取りをすることと、野菜の葉っぱに酢を散布することくらいでしょうか。

●畑は人間の作った場所です。虫や雑草には勝手に人間が自分の領地だと主張しているに過ぎません。彼らに私の畑を荒らされるのは癪に障りますが、人間同士の領地争いが絶えない現実を見れば、虫や雑草との共存を目指すことがきっと最善の方法に違いないのでしょう。

5月・6月スケジュール

月	火	水	木	金	土	日
			9 映画会 13時半から	10	11	12 写経会 13時半から
13	14 読書会 13時半から	15	16 映画会 お休み	17	18	19
20	21	22	23 映画会 13時半から	24	25	26
27	28 読書会 13時半から	29	30 映画会 お休み	31	6月1日	2
3	4	5	6 映画会 お休み	7	8	9 写経会 13時半から

読書会
5/14・28（火）
13時半

写経会
5/12・6/9
（日）13時半

映画会
5/9・5/23
（木）13時半

狂言綺語…寺子屋

琉游舎
Ryu Yu Sha
Place to pray, play and progress

三重県伊賀市のケーブルテレビ番組「伊賀びと」で、私の法友注１が開いている寺子屋の様子が放映され、その模様がFacebookにアップされていたので私も拝見することが出来ました。彼は400年続く浄土真宗髙田派の寺の副住職で４年前までは横浜で小学校の教師をやっていた方です。教師を辞めてふるさとの伊賀市に戻ると決めたとき私の会社時代の同僚から私のことを聞き及んで、わざわざ話を聞きたいと琉游舎までやってきてくれました。私もまだ琉游舎を開いて二年半あまり、試行錯誤の状態だったので、彼に何か参考になるようなことを具体的に話したわけではないはずですが、琉游舎の理念「老若男女誰もが集える『場』ー集いの場、祈りの場、学びの場、稽古の場、語りの場、瞑想の場ーすべての人に開かれたオープンコミュニケーションスペース」に恐らく彼は共鳴してくれたのだと思います。その後も引っ越し直前にまた訪ねてきてくれたり、帰郷後もネットを通して会話を積み重ねて、毎月の「無量寿経」のオンライン読書会も主催し、僧侶としての信行の道をお互い確認し合いながら今日に至っています。そして今回のドキュメンタリー映像で知った、４年間伊賀の自坊大仙寺で実践している寺子屋活動に、距離は遠く離れ宗派は異なれど、今この時代に私たちが必要としている仏の道を共に歩く、一人の善知識注１の姿を見ることができました。

寺子屋の活動について彼は「幸せな子供時代を体験できる場所にしたい。自分たちで価値を作ることの出来る存在であることを、自ら体験的に学べると言うことを大切にしていきたい」と語り、実際勉強も遊びもコミュニケーションも一緒になって同じ目線で楽しみ遊び学び合っている姿は、法華経観世音菩薩普門品第25に説かれた「遊此娑婆世界（この娑婆世界を自由に遊ぶ）」の菩薩の姿と見事に重なり合います。仏道は日常の中にあると言うことがここに如実に示されています。因みに彼は寺子屋では子供たちから先生とは呼ばれず名前で真人くんと呼ばれています。子供も真人くんも意識することなくごく自然に同じ実践の道、を歩んでいるように私には観ることができるのです。これが私の信じる仏の道の歩むべき姿です。寺の境内は子供たちの声と足跡に溢れています。住職である父上は「翌日の私の仕事のほとんどは境内の掃除に費やされる」と半ば嬉しそうにこぼしていました。遊ぶことは自由になること、そして学ぶこと、他者を思いやること、互いを幸せにし穏やかにすること、そこには狭いながらも安らぎの場所（涅槃）がありました。

映像の中では寺子屋卒業生の高校生が中学生の進路相談もしていました。皆率直に遠慮なく聞きたいこと伝えたいことを話している姿は、親や教師などの大人を通しての相談会では困難な同世代の身近にある体験の共有があるので、少し年上の先輩の言葉に素直に真剣に耳を傾けることが出来ているようでした。最近、放課後子供同士が遊んだり通学班や子供会など学年の異なる子供の交流（学びの場）が見受けられなくなったと感じます。親や教師を介してでは、子供がその年代で共有する価値観と経験による社会性は身につかないでしょう。大人を介した価値観と経験はどこまで行っても既存の価値観のコピーにしか過ぎません。日本が平成になってからずっと停滞を続けているように見えるのは、子供の世界が親や教師の大人のフィルターを通して作られ、子供独自の中から自然と作られる社会性精神性が希薄となったからではないかと考えます。大人たちの価値観を次の世代に強制し続けてきた結果の停滞と考えることは妄言に過ぎないことでしょうか。

真人くんと子供たちの「游此娑婆世界」は寺の境内と堂内です。そこには平等で自由な世界があります。先生と生徒ではなく「くんやちゃん」の関係です。そこで身につけた「自分たちで価値を作ることのできる存在だ」との自信は彼らが世界の枠を外へと拡げるに従って、幾度となく揺らぎ失いかけることがあるでしょう。それが大人になると言うことであり、社会的存在に成長していく過程では避けて通れないことです。そんな時戻ってくる場所にこの寺子屋がなってくれればいいと彼は語ります。それを「揺れている時に掴むつり革のような場所になりたい」と表現しています。つり革は揺れているときに必要なものですが電車が目的地に着いたら揺れは止まり下りることになります。つり革は心の揺れが収まれば手を離す揺れの一時避難所です。そこからまた彼らの住むべき社会に戻って行くための心身を再生するところです。ところで本来最強の一時避難所である親のところはどうでしょうか。そこが「帰ることの出来る場所」であればよいのですが「永遠の避難所」になってはいなか、昨今の家族関係を見るにつけ心配になってしまいます。

宗教が生活全てを規定してしまうことや、宗教を四六時中意識する生活を「宗教的生活」というならば、それは仏教の本質を見誤ることになるでしょう。私は宗教を宗教として意識しない毎日の当たり前の日々の中に、本来の宗教生活があると考えます。他の宗教については「宗教的生活」が何を希求しているのか私は理解していませんが、私の求める仏教は心穏やかに何事にも囚われない日々を望み願い行うことです。だから私は寺子屋で自由に学ぶ子供たちと真人くんに真の宗教生活を観ることができるのです。宗教で規定される教え（法）や戒律に縛られることなくこの世界を游戯（游此娑婆世界）し、そこで毎日が豊かで楽しく心安らかな日々となるように生活することが私の仏教生活です。教え（法）はその仏教生活を享受するためのひとつのアプローチの仕方と考えます。なぜならお釈迦様の唯一の願い（目的）は私たちを安らぎの処（涅槃）に導き常住してもらいたいということだからです。経に書かれた教えといわれるものは、目的のための手段を示している「仏教的教え」です。真の宗教生活は全ての「宗教的教え」から自由になることです。

伊賀から今度は寺で開かれた音楽会の映像が届きました。ピアノとフルートとオカリナが堂内を埋める満員の観客に響き渡ります。みほとけの声、法音です。５月の半ばにはジャズのコンサートが開かれるようです。宗教生活を送る真人くんが作る「場」に帰依します。南無。

注１：仏法の友、注2：人々を仏の道へ誘い導く人。